

令和元年6月28日現在

機関番号：33502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02161

研究課題名(和文) 内陸アジアにおける法華経の展開

研究課題名(英文) Development of the Lotus sutra in inner Asia

研究代表者

望月 海慧 (Mochizuki, Kaie)

身延山大学・仏教学部・教授

研究者番号：70319094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究調査により、基の『妙法蓮華経玄賛』のチベット語訳にあたる『妙法蓮華註』をその漢文と対照し、校訂テキストを作成し、和訳を完成した。この基礎資料に基づいてチベット語訳の特徴を分析したところ、両者の相違点の多くは、両者が依拠した『法華経』の原典の相違に由来することが明らかになった。また、チベット語訳とヴァスバンドウの『法華論』の関係を解明し、チベット語訳者は『法華論』を認識した上でその引用を省略せずに翻訳していることが明らかになった。さらに、内陸アジアの諸言語に翻訳された『法華経』とその関連文献を調査分析することにより、これらの地域における『法華経』の伝播状況が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果がもつ学術的意義は、仏教学研究において新たな文献資料の提示はもちろんであるが、チベット仏教における中国仏教理解が明らかになることである。また、ここで得られた古典チベット語と漢文の対照資料は、言語学的にも重要な資料となり、言語学などの関連分野の研究にも波及効果をもたらすものである。さらに、この内陸アジア的視座の導入は、インド仏教が中国に直線的に伝播したという従来の視座を批判するだけでなく、関連分野にもこの視座を提示することを提唱する社会的意義ももつ。

研究成果の概要(英文)： In this research I complete a critical edition of the Tibetan translation of the *Dam pa 'i chos punda ri ka 'i 'grel pa* and its Japanese translation, comparing it with its original Chinese source, *妙法蓮華経玄賛* *Miao-fa-lian-hua-jing Xuang-zang* of *基 Kuei-Chi*. With this basic material I clarify some characteristics of the Tibetan translations and find that the differences of Tibetan translation from its Chinese come from differences of the original of "the Lotus Sutra" that each depended on. Though *Kuei-Chi* confirmed it for the Chinese translation by *Kumarajiva*, Tibetan translator confirmed it for its Tibetan translation. In addition, the Tibetan translator obviously knew *法華論* the commentary on the Lotus sutra by *Vasubandhu* and never omitted to translate citations of it. Furthermore, I clarify the spread of the Lotus Sutra in inner Asia with investigating the related documents of the Lotus sutra translated into the languages of inner Asia.

研究分野：インド・チベット仏教

キーワード：妙法蓮華註 法華玄賛 基 法華経 世親 法華論 チベット語訳仏典

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

東アジア仏教に大きな影響を与えた『法華経』は、多くのサンスクリット語写本が発見されていることから、インドにおいても広く受容されていたことがわかる。これらの資料に基づき写本や漢文の法華経注釈書に関する研究が豊富になされている。しかしながら、いずれもがインド仏教的視点、中国仏教的視点でなされており、両者を繋ぐ視点を欠くものである。本研究では、そのような視点を批判的に考察して、インドから内陸アジアを経て中国に伝わった『法華経』が、中国から内陸アジアにどのように展開したのかを解明することを目的とする。その予備的調査として次のことを行ってきた。

(1) チベットにおける『法華経』の受容

『法華経』のチベット語訳については、Nils Simonssonによる蔵外のチベット語訳に対する研究に始まり、近年のカンギュル伝承研究の成果を受けて辛嶋静志は『法華経』のサンスクリット写本からチベット語訳の伝承過程を解明している。チベットにおける『法華経』の注釈書については、中村瑞陸によるバクパの小論に対する研究がある。本研究代表者も、ガンボパの『ラムリム・タルゲン』やツォンカパの『ラムリム・チェンモ』などのチベットの論書における『法華経』の引用についての調査報告を行ってきた。

(2) チベット語訳『法華玄賛』の研究

チベット大蔵経には、漢文からチベット語に翻訳された文献が複数存在する。カンギュルにおけるこれらの文献については、ライデン大学のジョナサン・シルクが現在研究を行い、申請者と情報交換を行っている。テンギュルには、法相宗の基が著した『法華経』の注釈書である『法華玄賛』が漢文からチベット語に翻訳されている。この注釈書については、渡辺瑞蔵、山口益、中村瑞隆、遠藤充久による部分的研究が発表されているだけであり、研究代表者は、2013年より本研究の予備的研究としてこのチベット語訳の和訳研究と漢文の『法華玄賛』との比較対照を行ってきた。

(3) 内陸アジアにおける法華経の展開

『法華玄賛』は内陸アジアにも伝播しており、トルファン文献のウイグル語訳が現存し、百済康義による研究がある。漢文写本の断片も報告されており、『法華玄賛』が内陸アジアに広く伝播していたことがわかる。これは『法華経』自身が内陸アジアにおいても広く受容されていたからである。このような問題意識を受けて、2014年に研究代表者は、日本印度学仏教学会において「内陸アジアにおける法華経の展開」というパネル発表を行った。ここでは、辛嶋静志による「大乘仏典の成立 方等経と大衆部」、片山由美による「コータン語『法華経綱要』と『法華論』」、榎殿伴子による「チベットにおける『法華経』の用法 一乗思想と観音信仰」、代表者による「『法華玄賛』のチベット語訳の特徴」、金炳坤による「西域出土法華章疏の諸相」という発表を行い、内陸アジアにおける大乘経典の展開の新たな方法論を『法華経』をモデルケースとして提示した。

このような研究背景に基づき、『法華玄賛』のチベット語訳を中心として、内陸アジアにおける『法華経』の展開に関する研究をスタートした。ただし、本研究が対象としているものは、『法華経』であるが、それらは一つのモデルケースでしかなく、あくまでも内陸アジアに視座をおいた仏教文献の伝播に関する新たな研究方法を仏教学研究に導入することを意図している。

2. 研究の目的

本研究が目的とすることは、中国に伝播した法華思想がチベットにおいてどのように展開したのかを解明することである。研究期間内に達成すべき具体的な目標は、次の3点にまとめられる。

(1) 漢文文献がチベット語に翻訳された過程の解明

基の『法華玄賛』の漢文テキストについては、西域で発見された仏教写本が複数存在し、漢文からのウイグル語訳断片も現存している。このことは、敦煌などの学術的研究が行われていた場所で、同論が広く読まれていたことを示す資料になる。これらの地域の仏教を内陸アジア仏教としてとらえなおすことで、中国仏教文献である『法華玄賛』が国際的なものになる。そのような視点から『法華玄賛』がチベット語やウイグル語に翻訳された意図とその背景を分析することで、インド仏教でもなく、中国仏教でもない、内陸アジア仏教の一面が明らかになる。

(2) 漢文からチベット語への訳語の解明

チベット大蔵経の経論のほとんどはサンスクリット語からの翻訳文献であり、漢文から翻訳された文献の数は少なく、その語彙資料はまとめられていない。この漢文からチベット語に翻訳された文献を取り上げ、古典チベット語と漢語の語彙対照表を作成することで、言葉の対応関係を明確にする。また、チベット語への翻訳スタイルや翻訳方法も分析することで、当時のチベット人の漢語理解や、チベットの漢文翻訳家の活動状況などが明らかになる。

(3) チベット人の中国仏教理解の解明

テンギュルには、円測の『解深密経疏』と基の『法華玄賛』という二人の法相宗の学僧の著書のチベット語訳が収録されている。いずれもが大乘経典の注釈書であるが、中国の瑜伽行唯識思想の立場から著されたものである。チベット仏教の学僧であるツォンカパが『ラムリム・

チェンモ』において真諦の唯識説に言及するように、チベット人は中国仏教にはインド仏教とは異なる思想解釈があることを認識しており、本論のチベット語訳は中国仏教をチベットに伝える重要な資料となりうるものである。本論の内容を検討することで、チベット人の中国仏教理解の一端としての『法華経』理解、唯識思想理解が解明される。そのことは、内陸アジアにおける『法華経』の展開の一面を明らかにすることにもなる。

3. 研究の方法

上記の研究目的のために、チベット大蔵経のテンギル所収の『妙法蓮華註』(D. No. 4017, P. No. 5518)を基本文献として取り上げる。同論は、漢文の『法華玄賛』のチベット語訳であり、中国西域で広く読まれ、ウイグル語にも翻訳された文献である。その研究方法は、次のようにまとめられる。ただし、それぞれの作業を同時並行的に進める

(1) 『妙法蓮華註』のチベット語訳の校訂テキスト作成

チベット語訳のチヨネ版、デルゲ版、ナルタン版、北京版、金写版の5つの版本を比較対照して、諸版の異同を確認する。その結果を利用してチベット語訳の批判的校訂テキストを作成する。その際に、Asian Classic Input Projectにより作成された電子データを利用する。この校訂テキストでは、各章ごとに『法華経』からの経文引用のナンバリングを行う。その際に、『法華経』の経文についても、サンスクリット、チベット語訳、漢訳を対照する。また、チベット語訳に漢文を並記し、その対応関係を明確にする。これらの校訂テキストに基づいて、チベット語訳の特徴を考察する。

(2) 『妙法蓮華註』の和訳の完成

チベット語の校訂テキストに基づいて、和訳を完成する。和訳作業を行う過程で、チベット語訳と漢文の相違をより明確にし、翻訳の省略などに見られる翻訳者の意図を考察する。また、後の索引作成のために語彙の対応関係もまとめておく。これらの和訳については、所属機関の学術誌である『身延山大学仏教学部紀要』や『身延論叢』などに順次発表する。

(3) 引用文献の調査

漢文の抄訳であるチベット語訳には、引用文献の省略が多数見られることがわかっている。その中にはチベットに伝承されていない文献も含まれているのだが、省略されていない文献はチベット語訳者が意志をもって翻訳したことがわかる。その中の一つに、ヴァスバンドウの『法華論』がある。チベットでは目録に掲載されているものの、その後その存在が不明となっている『法華論』のチベット語訳との関係を考察し、チベット語訳者が『法華論』をどのように理解していたのかについて解明する。

(4) 語彙索引の作成

漢文とチベット語訳の語集の対応関係を明らかにすることで、漢文からチベット語への翻訳方法を明らかにする。

(5) 西域文献の調査

西域文献から『法華玄賛』に関する資料を収集し、本テキストが漢文からチベット語に翻訳された過程を明らかにする。同論には敦煌文書に複数の写本が残っており、さらにはトルファン文献には漢文からのウイグル語訳の断片が残っている。また、漢文からのチベット語訳が現存するもう一つの論書である円測の『解深密経疏』のチベット語訳の経緯や、マルチ・リングル仏教文献が残る西域出土の仏教文献の状況などを総合的に分析することで、本テキストがチベット語訳に翻訳された意図、ならびにチベットに与えた影響などを考査する。

以上の調査結果を総合的に分析することで、内陸アジアにおける法華思想の展開を明らかにする。

4. 研究成果

上記の研究目的と研究方法に基づく研究成果は以下の通りである。

(1) 『妙法蓮華註』の校訂テキスト

校訂テキストでは、諸版の異同を注記するだけでなく、『法華経』の引用を章ごとにナンバリングした。この分類ごとに相応する漢文を並記し、抄訳されたチベット語訳に対応する漢文を明示した。また、言語資料として語彙の対照を巻末に添えた。この校訂テキストについては、校正作業を経た上で、『法華経研究叢書』の1冊として刊行予定である。

(2) 『妙法蓮華註』の和訳

チベット語訳『妙法蓮華註』の和訳を完成し、全11章の翻訳を『身延山大学仏教学部紀要』や『身延論叢』などに掲載した。ここでは、漢文の翻訳を省略した箇所を分析し、それぞれの省略の理由についても考察した。

(3) 『法華玄賛』のチベット語訳の特徴の分析

『妙法蓮華註』としてチベット語訳された『法華玄賛』に対する上記のテキスト校訂と和訳作業において、チベット語訳の特徴が明らかになった。両者の相違や省略の多くは、『法華経』のチベット語訳と漢訳の相違に起因する。すなわち、章の配置と順番、偈頌の数、翻訳の欠落と異同等であり、このことは、チベット語訳者が『法華経』のチベット語訳を見ながら同論を翻訳していたことを示しているチベット語の翻訳が第11章の途中で終わっているのも、チベット語訳法華経に存在しない「提婆品」に起因している。引用文献については、翻訳を省略する傾向にあり、『大智度論』や『十二門論』などのチベットに伝承していない文献については、タイトル比定もできていない。さらに、中国独自の漢文文献や、漢語による語義解釈や音写語

の説明などについては、チベット語訳者は全く理解できなかったのが、翻訳はなされていない。この成果については、トロント大学で開催された第17回国際仏教学会において発表した。

(4) チベットにおける『法華論』の書誌情報

『法華論』の書誌情報は9世紀の『パンタン目録』と13世紀のチョムデンリクレルの目録や中国『至元録』ではそのチベット語訳の情報が記載されているが、13世紀のプトゥンの目録では失訳となっている。『妙法蓮華註』における『法華論』の41の引用から、同論のチベット語訳断片を回収することができた。この成果については、ベルゲン大学で開催された第14回国際チベット学会において発表した。

(5) 内陸アジアにおける法華経関連資料

内陸アジアにおける法華経関連資料を整理し、(1)サンスクリットの中央アジア写本、(2)コータン語の法華経概説書、(3)チベット語訳と解説書、(4)ウイグル語訳断片、(5)モンゴル語訳、(6)西夏語訳を確認できた。これらの相互関係を明らかにすることで、内陸アジアにおける『法華経』の展開を解明した。この成果については、立正佼成会で開催された第23回国際法華経セミナーにおいて発表した。

以上の成果から、チベット仏教における『法華経』の受容に関する貴重な情報を提示できた。特に、ヴァスバンドゥの『法華論』に関する書誌情報は、そのインド撰述の問題に対しても貴重な情報を提供している。また、内陸アジアにおける『法華経』の展開を分析した方法論は、同一地域における他の文献に対する研究にも応用できるものである。本研究の今後の展開としては、チベット仏教における漢文仏典への言及資料を収集分析することで、チベット仏教における中国仏教の受容を解明することが求められる。また、これらの成果は、内陸アジア仏教研究の構築の礎になるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計16件)

- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「譬喩品」和訳、日蓮仏教研究、査読無、10、2019、印刷中
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「方便品」和訳(2)、身延論叢、査読無、24、2019、pp. 1-74、
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳(2)、身延山大学仏教学部紀要、査読有、19、2018、pp. 63-120
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「方便品」和訳(1)、身延論叢、査読無、23、2018、pp. 1-40
- Kaie Mochizuki, Vasubandhu's Commentary on the Lotus Sutra in Tibetan Literature、印度学仏教学研究、査読有、65-3、2017、pp. 225-232
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「信解品」和訳、大崎学報、査読無、173、2017、pp. 37-80
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳(1)、身延山大学仏教学部紀要、査読有、18、2017、pp. 1-39
- 望月海慧、『法華玄賛』のチベット語訳の特徴、Critical Review for Buddhist Studies、査読無、17、2015、pp. 17-39
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳、身延論叢、査読無、20、2015、1-54
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「薬草喩品」和訳、身延山大学東洋文化研究所報、査読無、19、2015、pp. 77-103
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳、身延山大学仏教学部紀要、査読有、15、2014、pp. 1-18
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳、日蓮仏教研究、査読無、6、2014、pp. 7-22
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳、日蓮教学教団史の諸問題、査読無、2014、pp. 41-51
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳、身延論叢、査読無、19、2014、pp. 35-58
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳、法華文化研究、査読有、39、2013、pp. 1-15
- 望月海慧、チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について、身延山大学仏教学部紀要、14、2013、pp. 1-22

〔学会発表〕(計4件)

- Kaie Mochizuki, The Lotus sutra in the inner Asia, The 23th Annual International Lotus sutra Seminar, 2018
- Kaie Mochizuki, A Commentary on the Lotus Sutra translated from Chinese into Tibetan, 17th Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2017

Kaie Mochizuki, Vasubandhu's Commentary on the Lotus sutra in Tibetan Literature, 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, University of Bergen, 2016
望月海慧、チベット語訳『法華玄賛』に言及される世親の『法華論』、日本印度学仏教学会第67回学術大会、2016

〔図書〕(計1件)

望月海慧他、山喜房佛書林、アジアに広まる仏教、2016、214

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

なし

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。